



TITLE:

2)「研究開発コロキウム」報告〔要約版〕：〔大学院GP〕採択：臨床的方法としての「めぐる」ことの体験的研究

AUTHOR(S):

山本, 有恵; 皆藤, 章; 千秋, 佳世; 松井, 華子

CITATION:

山本, 有恵 ...[et al]. 2) 「研究開発コロキウム」報告〔要約版〕：〔大学院GP〕採択：臨床的方法としての「めぐる」ことの体験的研究. 研究開発コロキウム：平成19年度 成果報告書 (Colloquium for Educational Research and Development) 2008: 48-49

ISSUE DATE:

2008-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/143074>

RIGHT:

臨床的方法としての「めぐる」ことの体験的研究

A Study on “Around-ness” for a Clinical technique

研究代表者 山本 有恵 (D2) 教員 皆藤 章
研究分担者 千秋 佳世 (D2) 松井 華子 (D2)

〔研究目的〕

心理臨床学の研究の実際に於いて、本来的に表象不可能と考えられるようなことがあたたかも実体的に語られることが往々にしてある。それは例えば「魂」や「自我体験」といったことであり、用語として質問紙の項目としたり、調査的に得られた語りを分析し、数量的に扱うような研究方法が多く採られてきている。

しかし本研究では、果たしてそれらが本当に対象的に語り得るのか、そもそも対象化不可能であると仮定すれば如何なる研究方法が可能であるかという問題意識から出発し、それらを「テーマ」として、「そのテーマをめぐる語り」を聴くという体験を得ること、そして語りの内容を分析することを主眼とするのではなく、その体験から、対象化の叶わないテーマを「表現」していく臨床的な方法として「めぐる」ことの可能性を考察していくことを目的とした。

そこで今回は特に表象不可能なテーマとして「魂」を選び、現代日本において日常的に色濃く「魂（まぶい）」という語に接している沖縄という地域を選び、「魂をめぐる語り」に立ち合おうとするフィールドワークの形式を採ることとした。

〔研究経過〕

まず千秋が修士論文において採った方法を基盤に研究担当者・分担者全員で3回のディスカッションの機会を持ち、「めぐる」という方法の特性の検討をおこなった。また、研究方法としてフィールドワークという形式を採るにあたり、この形式そのものの検討を行なった。その検討のなかで、フィールドワークという形式は単に現地に行き目的を果たせばそれでよいのかという問題意識から「臨床的方法」ということと合目的性のそぐわなさが検討され、「語り」を「求める」姿勢ではなく、まずは現地にて過ごし、そのなかで現れてくる出会いや語りをそのまま体験することを大切にしようとするよ

うな姿勢の必要性が本研究に確認され、当初の研究目的の変容がもたらされた。

また、フィールドワーク先も、当初の「沖縄」という広い設定から波照間島と決まり、日程も各々の日常において可能な日程を設定することとした。結果、出発は1月29日であり、そこから千秋・松井・及び授業登録者である古川の帰京は1月31日、山本の帰京は2月2日と決まった。

【研究成果】

まず事前のディスカッションにおいて詳細に検討された「めぐる」ということの方法的特性は以下のようなものである。すなわち「テーマ」とはキー・ワード的な存在として「めぐる」ことの進路付けに関わる一方で、直接的に「得る・求める」ことの対象とはなり難いものであり、「めぐる」ことの主体は定まらぬ目的に翻弄されつつも、その道行きを「引き受ける」ことにおいて主体性を発揮するのではないか。そうして主体的に「めぐる」ことを引き受けて生成されていったその道行き全体が、振り返って結果的に「過程」となる可能性を持つのではないか。すなわち「めぐる」とは、希求による対象化が叶わないながらも、「テーマ」を自身の日常的な生に引き受けることによって、主体的に動いていかざるを得ないような主体性の発揮のされ方と言えるだろう。

このようなディスカッションの成果を得て、波照間島では「魂」というテーマを常に念頭に置きつつも、それを「求める」のでは無く、研究者がそこでの「日常性」を生きるような姿勢を大切にすることにした。時折「この時期の波照間に何をしにきたのか？」という問いがもたらされるのに対しては正直に当初の目的を語り、「魂（まぶい）」という語を持ち出したが、その度に、その語が波照間の人々の「日常」の中には姿を現し難いものであることが感じられた。それは秘め事というよりは、あまりに当然のことであり、一々対象化して語ることはない、といった様子であったように思う。

また、波照間の「日常性」を生きようというのは、「異人（マレビト）」として波照間島の人々の生に寄り添うということであったと言える。波照間の日常性に対し、我々は「何もわかっていない」者として、そこにいる外はなかった。

しかしこのような体験は、心理臨床の実践においてクライアントに出会うことと共通する様相を呈していたと考えられた。事前のディスカッションにおいて、松井は波照間島に行くということを「出会う」こととしてそこにおける「見立て」の可能性を述べたが、そこには、クライアントの日常性に対して「何もわかっていない」者としてしか出会っていけない中で、必死に出会いを引き受けるという形で発揮される心理臨床家の主体性が重ねられると言えるだろう。

当初の方法は変容したが、結果、本研究において「めぐる」という方法への臨床的な論考がより深められたと考える。今後も更に考察を深め、心理臨床家の訓練的体験となる可能性も考えながら、「めぐる」ことの更なる方法的可能性を考えていきたい。